シチュえっち

― Situation 1.　内ヶ島熙の幸運と、たぶん不幸の種 ―

夏目（なつめ）　棗（なつめ）

❑❑ 登場人物 ❑❑

●是枝 硯(これえだ すずり) ＝ 身長：１５６㎝、体重：４７㎏、スリーサイズ：８７（Ｃカップ）・５８・８５。椎葉学園(しいばがくえん)三回生。眼鏡にひっつめ髪という見た目通りの真面目一本槍なクラス委員長。しかし、眼鏡を外してひっつめ髪を解くと《困った女神》が彼女の心に降臨するのだが、知っている人は少ない。

●内ヶ島 熙(うちがしま ひろむ) ＝ 椎葉学園三回生。硯のクラスメートで 自分では《ナンパ師》と言っているが、実際は得恋した事はない《モテないくん》。

●嵯峨島 彩(さがしま あや) ＝ 保健室の養護教諭。ぽわん、とした癒し系。

保健室の扉を開けようとした内ヶ島 熙(うちがしま ひろむ)は、逆に向こうから開かれて慌てて後退(あとじさ)ってそのまま廊下に尻餅をついてしまった。
「あら、まあ……ごめんねえっ！」
扉を開いた養護教諭の嵯峨島 彩(さがしま あや)先生が手を差し伸べた。
「……ええと、内ヶ島くん……だったかしら、どうしたの？」
「あっと……その……ひ、貧血気味で……」
柔らかで暖かい掌に掴まって立ちあがった内ヶ島は少し躊躇(ためら)うように口を開いた。
「体育の授業で走らされていたんですが……その、ふらついて……渡辺先生が保健室で休んでこいと……」
「ふ～ん？ ……また、夜遅くまでエロゲーやってたんでしょ？」
「なっ!? ……ち、ち、違(ちげ)え……ます…って……」
あっさり図星を突かれた内ヶ島が視線を逸らす。今までも幾度か〝サボり〟を見抜かれていた内ヶ島だった。

「もぉ！　……君も受験生なんだから、勉強して寝不足にならなくちゃ、ね？」
「いや、だから彩ちゃん先生……」
何か言い訳を口にだしかけた内ヶ島を遮って嵯峨島先生が言った。
「ああ、こうしちゃいられないわっ！　……あたし、これから 学会に出席しなくちゃならないのよっ！　……今日は戻らないから一眠りしたら勝手に帰ってね！」
「ええと、ここの鍵は？」
「内側からロックして閉めれば施錠されるから……ああ、他の人が来ても困るから今もロックしておいて……じゃあ、一時間眠ったら次の授業はでるのよ、いいっ？」
慌しく言うだけ言って立ち去りかけた嵯峨島先生が振り返って、声を顰(ひそ)めて付け加えた。
「そうそう、もう一人……君と違って本当に受験勉強で寝不足な人が眠ってるから大きな音を立てて起こすんじゃないわよっ！」
「いや、俺も受験勉強で……」
「じゃあね、くれぐれも静かにねっ！」
言い募る内ヶ島の言葉をスルーして嵯峨島先生は行ってしまった。
（まっ、いいか……これで堂々と放課後まで眠れるって訳だ！）

保健室に入って扉を内側からロックすると、内ヶ島は一応先生の言い付けを守って静かに室内を見渡した。
確かにベッドの一つがカーテンで閉じられていた。
音を立てないように気をつけて隣のベッドに潜り込んだ内ヶ島は、頭の下で枕を直してから、ゆっくり、と毛布の中で四肢を伸ばした。途端に眠気が襲ってきて大きく欠伸をした時だった。
彼の耳に微かな呻き声が聞こえてきたのだった。
どうやら隣のベッドからのようだった。
少し苦しそうな、それを必死に堪えているような呻き声に思えた。
（ま、拙いなっ！……彩ちゃん先生、出掛けちゃったもんな……）
「……うっ……んっ……うぅ、んっ……」
その間にも呻き声ははっきり聞き取れる程になっていた。
（……ど、どうすっか？……取り敢えず…様子を見て……）
内ヶ島が、そっ、とカーテンの隙間から隣のベッドを覗くと、頭から毛布を被った人の形が『く』の字に折れ曲がって、びく、びくっ、と震えていた。
（ま、マジ、ヤバくね？）

その思いとは裏腹に、毛布の裾から食みだした真っ白い足と黒いソックスに視線を奪われていた。しかも、ベッドの脇に置かれた椅子に制服のスカートが畳まれているのまで眼に入って内ヶ島の心臓が、とくん、と跳ねた。

（す、スカート……は、穿いてねーっ!?）

いや、勿論、皺になるから脱いだのだろうが、それだけで内ヶ島の体操ズボンの前が突っ張っていた。

「……んっ……ああっ……んんっ、あひぃっ♪」

しかも、苦痛に呻いていた筈の声までが、何やら艶かしい嬌声に聞こえてくる。

（お、落ち着け、俺っ！……『大丈夫ですか』っつって声を掛けるんだ……そして、お近づきになって……）

どんどんと善からぬ方向に妄想を膨らめる（いや、体操ズボンの前も膨らめていたが）内ヶ島の耳に、また声が届く。

「……あんっ……こ、こんなトコで……いんっ……だ、だめなのにぃ……ああんっ……ゆ、指ぃ……あんっ……止まらないぃ♪」

（ち、違(ちげ)えよっ！……オナってるよ、この女っ!?）

見れば、『く』の字に折れ曲がった尻の辺りの毛布が小刻みに揺れている。見間違

いでも、自分の妄想でもなかった。
嵯峨島先生曰く『君と違って本当に受験勉強で寝不足な人が眠って』いないで、あろう事か、学園の保健室でオナニーをしていたのである。
（痴女、キターっ！）
内ヶ島は毛布の下で忙しなく蠢き始めた彼女の痴態に眼を奪われていた。
「んっ、んんっ……いいっ♪……気持ち、好いんっ♪……うん、んんっ……らめぇ……き、きちゃうっ!?……んんっ、ぅんんっ……く、くりゅううっ!?」
必死に堪えていた嬌声が昂ぶりに合わせて高くなる。毛布を揺らす手指の前後動がはっきり見てとれる。毛布から食みだした黒ソックスの爪先が内側に折れ曲がる。毛布に包まれた身体が、びくん、びくくんっ、と強張るように硬直する。
「あああっ、ああっ…ら、らめっ!?…くりゅぅ!!…ああああっ、ああああっ…いいっ、いきゅっ……いいぃ、いっきゅうううううっ♪」
彼女が感極まったように身体を仰け反らせた拍子に毛布が摺れて白い足が太腿まで露わになった。淡い若草色のショーツが膝の辺りまで摺り下げられて丸まっているのが酷くエロティックだった。
「……あはぁ…はあ、はぁ……はぁぁ…」

呼気を整えるように毛布の胸元で双つの膨らみが上下して、尚も酸素を必要としたのか、ばさっ、と毛布が撥ね除けられた。下から現れた整った顔立ちに、どきっ、と鼓動が高鳴る。その微かに寛いだ口元から、乾いた唇を湿らすかのように薄桃色の舌先が、ちろり、と覗いて舐め廻した。

思わず、ぐびっ、と喉を鳴らしたからといって彼が責められるだろうか。

いや、いま問題なのは、その音に反応して彼女が両の瞳を開いた事だった。咄嗟にカーテンの陰に身を退いた内ヶ島だったが、その僅かな瞬間に彼女の瞳が見開かれ険悪な色を湛えたのがはっきりと判った。

微かな衣擦れの音に続いて、カーテンの向こうから怒りを抑えたような彼女の声が聞こえた。

「……出てきなさいっ！」

その声音に、びくっ、と竦みあがった時点で彼の負けは決まったも同然だった。後になってよくよく考えてみれば《やましい行為(オナニー)》をしていたのは彼女の方なのだ。だから、本当なら覗かれた方が優位に立つのは可変(おか)しな話だった。

「覗きは、犯罪なんだぞ……内ヶ島くん？」

しかし、続けて聞こえた言葉に彼の負けは確定した。

「へぇえっ!?……な、何で俺の名前を……し、知ってる…のさ……？」
内ヶ島にとっては見覚えのない顔だった。こんな美少女がこの学園に居たのを見逃していたとは《ナンパ師》を自称する彼にとって迂闊という他なかった。いや、いま問題なのは彼女が自分の名前を知っていた事だった。
現場を押さえられた犯罪者宛(さなが)らに蒼い顔でカーテンを捲った内ヶ島を、少し途惑うように彼女が見返した。
「えっ？　……わたしって、気づいて……ない……？」
(あっ……そうか、わたし眼鏡を外して髪も下ろしていたんだ……)
彼女――是枝 硯(これえだ すずり)は少しく、ほっ、としながらも些か複雑な心境だった。硯は学園で眼鏡を外す事は滅多になかった。何故なら小学校の低学年の頃から(勉学一途だった為だが)慣れ親しんだ眼鏡は、最早、硯の身体の一部と言って良かった。それを外すという事は、硯にとって大袈裟に言うならストリップをするのと同じ意味を持っていた。更に、ひっつめにした髪を下ろすと性格までが困った方向に変わってしまうので、余程の事がなければ他人の前でする事はなかったのだ。
ただ、この保健室だけは例外だった。養護教諭の嵯峨島先生は、硯の素顔を、いや硯の素の心を知っている数少ない他人だったのだ。

「……ねえ、何で俺の名前を、知ってる…のさ？」
同じ言葉を掛けられて、少し想いに耽って黙り込んでいた硯が視線を向けると探るような眼で彼が見詰めていた。
「あっ？　……ああ……う、内ヶ島って、有名だからね……可愛い女の子には　手当たり次第ナンパを仕掛けて、しかも、ことごとく玉砕している……ってね？」
「ち、ち、違(ちげ)ーってっ！」
「いいえ、違いませんっ！」
今年から同じクラスになった内ヶ島は、硯にとって大して興味が湧いた相手ではなかったが〝その噂〟は別のクラスだった去年からもよく耳にしていた。
「そ、そんなコトねーってっ！　……まだ、声を掛けていない美少女もいるから……」
（……って、そっちかいっ!?……玉砕してるのは認めてるんだ？）
「だ、だって……き、き、君みたいな美少女がいるのだって……お、俺……し、知らなかったしぃ……」
（やっぱり、わたしって気づいてない？　……って、早速ナンパっ!?）
こんな場面を見られた相手に自分だと気づかれなかったのは幸いだが、しかし、クラスメートに気づかれない自分って……と硯はまた複雑な思いで内ヶ島を見遣った。

嵯峨島先生は常々硯にコンタクトにするように勧めていた。その方が絶対可愛いからと言うのが嵯峨島先生の持論だったが、硯は頑なに拒み続けていた。それが、妙な処で救いの手立てになって思わず笑ってしまった。

「な、何が可笑(おか)しいんだよぉ？」

「ぷふっ！ ……ごめん、ゴメン……内ヶ島のコトを笑った訳じゃないのよっ！ ……仕方ないわね、口止め料よっ！ …きてっ♪」

硯は摺れていた毛布で、がっちり、と身体をガードし直してからベッドの端に腰を降ろすと内ヶ島を見遣って、カモンっ、と指先で促した。

（あっ、ヤバい……わたし、ちょっとスイッチ入ってる？）

そうなのだ。眼鏡を外し、前髪以外は後頭部にひっつめにした髪を下ろすと、硯の心に《淫乱な女神》が降臨するのだった。慣れ親しんだ保健室だった事と、しかも嵯峨島先生が出掛けて一人切りな状況に安心し切っていた処があった。

「えっ？ …あ、あの？」

状況が理解できずに内ヶ島が視線をさ迷わせると、硯がまた自分の足元を指差して催促した。

「は・や・くっ♪ ……ここにきて、ズボンとパンツを脱ぎなさいっ♪」

「ふぇえっ!?……な、何言って…る…?」
「だ・か・らぁ……口止め料にぃ、いいコトしてあげるって言ってるのぅ♪」
その言葉に内ヶ島の鼻の下が、ずろんっ、と伸びたのを可笑(おか)しそうに見遣って硯がまたも催促する。
「ほらあ、わたしの気が変わらない内にさっさと脱ぐのよっ！」
「は、はは……はいぃ！」
もどかし気に体操ズボンのボタンを外して内ヶ島はそれを床に落とした。しかし、真っ白いブリーフのゴムに手を掛けたまま内ヶ島の手が止まり、硯を見あげた。
「あ、あの……そんなに、マジ、マジ、見詰められてると……」
「は・や・くぅ♪」
しかし、艶めいた視線をブリーフの、もっこり、とした膨らみにホールドしたまま硯が素知らぬ顔で先を促す。
「勃起しちゃったおちんちん……早く、み・せ・てっ♪」
そう揶揄(からか)うように言った硯の半開きの口元から薄桃色の舌先が覗いて唇を湿らすように舐め廻した。
（……も、もしかして……く、く、口でしてくれるのか？）

頭に浮かんだその思いが羞恥心を押し退けて、内ヶ島が一気にブリーフを摺り降ろす。現われた《逸物》が、びくんっ、と跳ねて下腹に貼りついていた。

「やだ、やだぁ❤」

桃色の吐息を吐いて硯が両手で顔を覆った。いや、正確に言うなら覆ったのは両の頬だけで、硯の視線は内ヶ島の《逸物》にホールドされていたのだが。

「もおぅ！　……おちんちん、がっち、がち、に勃起して　お腹に貼りついてるじゃないよぅ……す・け・べっ♪」

「うう……うっ！」

改めて美少女の口から〝伏字なし(おちんちん)〟で指摘された内ヶ島が頬を染める。何気に両手で前を隠すと空かさず〝ダメだし〟が飛んだ。

「隠すんじゃないのっ！　……してあげないよぅ？」

またも舌舐めずりしながら言われて、おず、おず、と両手を除けた内ヶ島の股間をたっぷり視姦してから、硯は毛布の中から片足だけだして《逸物》に向かって差し伸べた。

「ちょ、ちょっと……ま、待ってっ！」

慌てて腰を退いた内ヶ島が言い募る。

「……ま、まさか足……あ、足でぇ!?」
「ええっ？　……厭なのぅ？」
硯が惚けた顔で訊き返す。
「いや、せめて手とか……く、く、口とか……」
「えぇ～っ！　……こんなばっちいモノを咥えろって言うのぅ？」
「や、その……え、えと……」
視線を泳がせる内ヶ島を見詰める硯の表情は口にした言葉ほど厭がってはいなかったのだが、未だ《童貞》の彼には見抜けなかったのかも知れなかった。
「……それならぁ……お涎(よだ)を垂らして手コキ……で、どう？」
妥協案を提示した硯に内ヶ島は頷く外なかった。
「うふんっ❤　……それじゃあ、もっとこっちへ来なさいよぅ♪」
勿論、硯は《処女》ではない。だが、過去の相手との行為は常に受け身だった。例え女性上位な体位を取らされたとしても、立場的には硯が受け身だった。
しかし、いま、硯は明らかにこの行為のイニシアチブを握っている事に興奮を覚えていた。先ほど自らの指で達した名残りではない潤いが股間を濡らしていた。
それを悟られないように身体に捲いた毛布を直すように押さえてから、硯は内ヶ島

の反り返る《逸物》に手指を伸ばした。
真っ白いしなやかな指先に握られた途端、びくうんっ、と彼の《逸物》が跳ねた。
「うふっ❤……がっち、がち、だね？」
硬度だけでなくその形状も確めるように《幹》を撫ぜながら余裕の笑みで見あげると、内ヶ島が悔しそうに見降ろしていた。
「……あ、あの……よ、よだれ…」
手指で扱くだけの硯に焦れて内ヶ島が催促した。
「慌てないのぅ……いまぁ、内ヶ島のおちんちんの形を確めてるんだからぁ……硬くてぇ、大(おっ)きいよぅ♪」
「……と、当然じゃんっ！」
自慢げに鼻の穴を膨らめた彼に硯の突っ込みが入る。
「でも、ピンク色だけどぅ？」
過去の相手の《それ》は黒々としていて、硯はその理由も知っていた。
(内ヶ島って、もしかして《童貞》……かな？)
喉まででかかった言葉を飲み込んだのは、まあ武士の情けというかクラスメートへの気遣いだ。

そして、硯は顔を《逸物》の上に翳すと、くち、くちゅ、と口腔に溜め込んだ唾液を約束どおり《鈴口》に、えろろろろろろろぅ……と垂らしていった。
「おほぅうっ♪」
気持ち好さそうな声に見あげると彼の視線が慌てて逃げていった。
「むふんっ❤」
ひとつ艶めいた吐息を吐いて硯は垂らした涎を《逸物》に塗しながら扱き始めた。途端に、きゅぽ、くぷっ、と硯の手指から卑猥な水音が洩れ聞こえる。
この行為も過去の相手に仕込まれたものだった。
硯の《初体験》の相手は二年半ほど前、この学園を受験するに当たって親にねだって付けて貰った家庭教師の先生だった。本当は、成績は良かったので家庭教師など必要はなかったのだが、硯にはある思惑があったのである。既に経験済みのクラスメートたちの会話から《初体験》は経験豊富な年上の相手がベストだという情報を仕入れていた耳年増な硯だった。だから自分から家庭教師派遣会社に出向き、何人かと面接して決めた相手だった。そして、二十代後半のちょいハンサム系の先生相手に『合格のご褒美』の名目で硯から求めて経験してしまったのだった。
彼にはその後も半年ほど家庭教師を続けて貰って、専(もっぱ)ら《そっち》の授業

ばかり受けていたのだが、ある日、結婚する事になったからと言われてあっさりと切れた。いや、元から心は委ねていなかった相手だったから硯にしても、さばさば、したものだったのだが。

（色々教わったなあ……男子を悦ばすテクニック……）

懐かしさが込みあげて硯は自分でも気づかぬ内に、手指で扱いていた《逸物》を口に咥えていた。

――はぶ…ぅ…ちゅぶっ、ちゅぽっ……くりゅっ、くちゅっ……ちゅぷっ、くぷっ、ちゅぶぅ……あふっ……えろろっ、るろぅ、りゅちぅ……

口腔に含んだまま舌を絡ませるように裏筋を舐めあげる。

（先生、ここを舐められるの好きだったよね♪）

「おほぉおおぅ!?……き、気持ちエエーっ♪」

「ふぇえっ!?」

頭上から降ってきた声に違和感を覚えて硯が見あげると、内ヶ島が感極まったように悶えていた。

（や、やだっ!?……内ヶ島のだった、このおちんちんっ！）

今更吐き戻すのも躊躇(ためら)われて、しかし、止めるに止められず半ば諦めにも

似た思いでフェラを再開する硯だった。
――ふぇろ、れりゅ……んっ……るろっ、ちゅぴ……
しかし、当然のようにお座なりなフェラチオだった。勿論、家庭教師の先生に《らぶ感情》など抱いてはいなかったが、それでも週二回咥え続けていれば愛着も湧くというものだ。だが、内ヶ島はクラスメート以上でも以下でもない、いや、そもそも今日まで大して意識にも掛からなかった相手である。しかも、硯はフェラする素振りで揶揄(からか)っただけで咥える心算など殆んどなかったのだ。
――れろ、くりゅ……はふっ…んっ……るろ、くぷ……
その熱の籠らないフェラチオに内ヶ島の方が焦れてしまった。最初に咥えられた時の艶かしい舌の蠢きを求めて硯の頭を掴むと乱暴の腰を突きあげた。
「……ふぃぐぅ!?……えぐっ、おぶぅ!?」
喉奥を突付かれて苦しげに首を振る硯の喉が嘔(えず)きを堪え、それが逆に内ヶ島の《逸物》を絞めつける結果となった。
「うっ!?…わひゃああっ♪……も、もおぅうっ…で、射精(で)る〜〜っ!!」
切羽詰った情けない声で呻いた瞬間、内ヶ島は硯の喉の奥に突き入れたまま射精してしまったのだった。

――びゅくんっ！　びゅる、びゅるるるっ……

（う、嘘ぅ……ウソでしょっ!?）

頭を押さえられて逃げるに逃げられず、硯は暴風雨のような熱い迸りを堪えるしかなかった。

――どびゅぷっ！　びゅるっ、びゅるるるうっ！　びゅぶるっ、びりゅるるるるるるぅっ!!　どびゅるっ、びゅるるるるるるるるるぅんっ!!

漸く放出が終わって内ヶ島の手が緩んだ瞬間、硯は握り拳を彼の鳩尾(みぞおち)に突き入れていた。

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

本篇では、この後、内ヶ島が硯からそれはそれは散々な目にあわされます。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。